

## 頭部に花粉塊をつけたメイガを採集

岡本 清

相坂耕作氏に何か昔のことを書いてみてはと頼まれたので、脳細胞が減少してしまった頭だが、短い採集記録なら書けるだろうと、報告例の少ない「花粉塊をつけた蛾」の採集例を報告する。

× × ×

1968年7月21日に笠形山々麓（兵庫県神崎郡市川町）での夜間採集でウスオビトガリメイガ（ヘリグロトガリメイガ）*Endotrica consocia* Butler を10 exs 採集した。うち、9exs が頭部に花粉塊をつけていた (fig. 1)。

花粉塊は7exs が左右の複眼に1本ずつ付着。1ex が右眼に、1ex が左眼に、1本付着していた。付着花粉塊が何かは筆者には不明であるが、植物図鑑（北村・村田・小山：原色日本植物図鑑〔下〕・1964）のラン科の花粉塊の図や、又発表された報文の写真とくらべてみるとラン科植物の花粉ではないかと思われる。

花粉塊をつけたガ類の報告例はごく少なく、前波鉄也氏の報文<sup>3</sup>によると、メイガ類で2例（クビシロノメイガ、マエキシタグロノメイガ）（付着花粉塊はオオバノトシボソウ）、ジャクガ類で3例（ウスオエダジャク、クロハグルマエダジャク、エグリズマエダジャク）、ヤガ類で2例（マメチャイロヨトウ、アカテンクチバ）である。

一度に同一種が9exs も花粉塊をつけて採集されるのはごく稀なことと思われる。丁度この時期がウスオビトガリメイガの最盛期とラン科植物の開花とがうまく一致したのであろう。

1968年7月21日に採集したメイガ類は下記の通り。（）内は採集数。和名のみを記す。

\*ツトガ亜科

ナカグロツトガ。

\*ノメイガ亜科

ゴマダラノメイガ、クロオビノメイガ、ウスムラサキノメイガ、フタマタノメイガ(2)、ヨスジノメイガ(3)、マタスジノメイガ、シロモンノメイガ、モモノゴマダラノメイガ、シロテンキノメイガ(6)、クロスジキンノメイガ、コヨツメノメイガ(2)、ホソミスジノメイガ、モンシロクロノメイガ、ツチイロノメイガ、オオツチイロノメイガ、ヨツボシノメイガ(2)、クワノメイガ(2)、

キササゲノメイガ、モンキクロノメイガ(3)、ヘリジロキンノメイガ(2)、  
モンスカシキノメイガ(2)。

\*ミズメイガ亜科

マダラミズメイガ。

\*ツツリガ亜科

フタスジツツリガ。

\*フトメイガ亜科

オオフトメイガ(4) ナカジロフトメイガ(3)、ナカムラサキフトメイガ。

\*シマメイガ亜科

ナカアカシマメイガ、ツマキシマメイガ(5)、アカシマメイガ、クシヒゲ  
シマメイガ(3) ギンボシシマメイガ(21)。

\*トガリメイガ亜科

ウスオビトガリメイガ(10) (Fig. 1)、ウスベニトガリメイガ。

\*マダラメイガ亜科

ミカドマダラメイガ。

尚、上記の記録を調べていて、アオフトメイガに(頭部に花粉が付着)とあるの  
をみつけた。

154 アオフトメイガ *Orthaga olivacea* (Walker) 6-VII-1961(頭部に花粉が付  
着)とある。

採集地は兵庫県多可郡黒田庄町(西脇高校黒田庄分校々舎)

標本を調べると、左の複眼に2本が付着。右の複眼に途中で折れた花粉塊柄が  
1本付着していた。



この小文を書くにあたり前波鉄也氏の報文を全面的に引用させてもらった。心から感謝する。また、27年前の記録を書く機会を与えて下さった、編集者相坂耕作氏にお礼もうしあげる。

#### 参考・引用文献

1. 井上 寛・杉 繁郎・森内 茂ほか:1982・日本産蛾類大図鑑、講談社
2. 江崎悌三・一色周知ほか:1957・原色日本蛾類図鑑(上)、保育社
3. 前波鉄也、1967・花粉塊を付けた蛾類3例・蝶と蛾Vol.17, No. 3&4 p. 81
4. 北村四郎・村田 源・小山鉄夫:1964・原色日本植物図鑑(下)、保育社
5. 池田二三高、1966・おしやれな蛾(カンザシをさしたアカテングチバ)・昆虫と自然Vol.1, No.9 インセクト・アルバム(読者の写真)
6. 坂部元宏・池田二三高、1967・カンザシををさしたアカテングチバ・昆虫と自然Vol.2, No.1 p. 38

#### 付記 花粉塊をつけたハチ

他の昆虫での報告例は、前波氏の報文によると、『石原(新昆虫10(8):14-5, 1957)はエビネの花粉塊を付けたミツバチで初めてこれを報じ、この花粉塊を「カンザシ」と呼んだ』そうである。その後、坂部・池田氏は(カンザシをさしたアカテングチバ:昆虫と自然2(1)1967)で『近年、三重県下では膜翅目、ミツバチ科のニッポンヒゲナガハナバチにラン科の花粉のカンザシが発見され話題となり(山下等, 1963)』と報じている。

外国ではラン科植物とくにフタバラン(*Ophrys*)とハチ類との関係について詳細な研究がなされていようである。その一端が「擬態:W. ヴィックラー・羽田節子訳」(平凡社・1970)に記されている。同書の239頁には、ムシラン(*Ophrys insectifera*)の花とヒゲナガバチの雄が雌バチに似せた花に交尾しようとしている図とその結果、頭に4個の花粉塊をつけた図が示されている。238頁にはオーストラリア産のラン、[クリプトスティリス(*Cryptostylis leptochila*)]の花と、(*Lissopimpla semipunctata*という)ヒメバチの雄が花と交尾しようとしている図とその結果、雄バチの腹部後方の背面に2個の花粉塊が付着している図がががられている。

[進化]の79頁には、坂部、池田も指摘している様に、花粉塊を頭部につけたハチが飛んでいる写真が掲載されている。

参考・引用文献

1. 前波鉄也、1967・花粉塊を付けた蛾類3例・蝶と蛾Vol. 17, No. 3&4 p. 81
2. 坂部元宏・池田二三高、1967・カンザシををさしたアカテックチバ・昆虫と自然Vol. 2, No. 1 p. 38
3. W. ヴィックラー著・羽田節子訳：1970・擬態、pp. 235-244 平凡社
4. ルース・ムーア著・宮山平八郎訳：1971・進化、pp. 78-79 タイム ライフ インター ナショナル
5. 田中 肇、1974・花と昆虫、保育社、

ミカエリソウからスギタニアオケンモン  
の幼虫を採集

岡本 清

1964年7月12日に笠形山でメイガの幼虫探しをしているとき、ミカエリソウ（しそ科）でヤガらしい幼虫2exsを採集する。7月17日と7月21日に蛹化し、うち1exが9月24日に羽化したが、翅が縮んだままでのびなかった。この蛾をながめていると、どうもスギタニアオモン（スギタニアオケンモン）らしくみえた。その後1965年にも採集したが羽化に失敗。1967年9月17日に採集した幼虫が11月10日に羽化して（4exs）、スギタニアオモン（スギタニアオケンモン）と同定できた。四年ぶりに解決した。記録は以下のとおり。

6. スギタニアオケンモン・*Nacna sugitanii* (Nagano)

24-IX-1964, 10-XI-1967(4), 31-VIII~11-IX-1968(6) : 幼虫を飼育して羽化させたもの（食草：ミカエリソウ：*Comanthosphace stellipila*）（笠形山）。

30年も昔の記録を発表するよう勧めて下さった相坂耕作氏にお礼もうしあげる。

参考・引用文献

1. 江崎悌三・一色周知ほか：1957・原色日本蛾類図鑑（下）、保育社
2. 井上 寛・杉 繁郎・森内 茂ほか：1982・日本産蛾類大図鑑、講談社